

探訪 北の風景 ⑥

郷土資料館と風力発電 留萌管内苫前町

青木和弘

東北地方から多くの人夫が入り込み、漁期を終ると去っていったが、その景気で定住者も増え、1880年（明治13年）に戸長役場が設置され、明治20年代後半には大量の農業移民が入植してくる。

未開の原野へ入植した者たちは、大量のブヨや蚊に悩まされ、イナゴ被害に苦しみ、開拓の苦勞は筆舌しがたいほどであったが、これが苫前の産業の基盤をつくりあげていった。

そんな歴史を学ぶのに絶好の場所が、旧役場庁舎を利用した「苫前町郷土資料館」である。そこには「苫前町考古資料館」が併設され、敷地内に縄文の家、擦紋の家、アイヌのチセが復元展示されている。

苫前町では1915（大正4）年12月に、10人の婦女子が殺傷（7人が殺され、3人重傷）された悲惨な熊被害事件があった。「三毛別（三溪）ヒグマ事件」で、その詳しい資料も郷土資料館にある。

事件は15家族が入植する三毛別の六線沢の集落で、冬ごもり前の一頭のヒグマが、空腹から人家を襲ったもの。その様子は、ノンフィクション作家の木村盛武が入念な聞き取り調査をしてまとめた報告「獣害史最大の惨劇苫前熊事件」に詳しく、1994年には共同文化社から『慟哭の谷』の「Devil's Valley」として出版された。作家の吉村昭も事件を取材し、小説「黒風（くまあらし）」



旧苫前町役場庁舎を使った郷土博物館には考古資料館も併設されている。洋風の町長室も見ることができる

を発表している。事件が起こった六線沢には「三毛別熊事件復元現地」があり、当時の生活を再現した家屋や慰霊碑、家を襲うヒグマのレプリカがある。六線沢への道路は冬季閉鎖なので、開通を確認してから行くといい。

苫前町で忘れてはならないのが風力発電だ。現在、再生エネルギーのシンボルともいえる風力発電設置に北海道でいち早く取り組んだのが苫前町だ。強い風を活用できないかと考えた。風力発電には、年中風が強いこと、広い土地があること、送電線との連系（系統連結）が速やかにできることが必要だった。土地はあり、羽幌炭鉱用に架設した6万6000ボルトの送電線もあった。町は1995年から通産省の事業で風速調査を行い、適正を確認して町営での事業化に取り組んだ。98

札幌市内から日本海沿岸を国道231号で北上すると、夏の間は青く穏やかで、キラキラと輝いていた。留萌市から40キロメートルほどに苫前町（人口3065人、3月末現在）がある。町名は、アイヌ語の「トマオマイ」で、雪解け後、いち早く青い花を付ける「エゾエンゴサクのたくさんあるところ」という意味だという。

ここは縄文時代から栄えていたとされ、先住のアイヌ民族と和人の間で長く交易がおこなわれていたが、江戸時代になると、和人の支配が強まって松前藩による「トマイ場所」が置かれている。本格的にニシン漁が盛んになるのは明治からで、春には





郷土資料館の敷地内にある「古代の里」には、紀元前3000年の頃の縄文の家、紀元10世紀頃の擦文の家、アイヌのチセの復元住居がある



苫前町郷土博物館にある巨大熊「北海太郎」のはく製。苫前町では1915年、悲惨な三毛別ヒグマ事件が起きている。「北海太郎」とは違うクマだ

年に北電が、特別高圧連系2万ボルト以上の発生電力は1キロワット時あたり11円60銭で購入することを発表。国は補助金を設けた。2000年に3基を夕陽ヶ丘地区に設置すると、民間業者も参入して、現在町内に42基、設備容量5万2800キロワットが稼働している。

町は本年7月に、現在の3基の運転をやめ、4000キロワットの、羽根の直径が現在の倍ほどの120メートルもある、巨大でシンボリックな風力発電装置1基に取り替える。

2018年度(2018年2月～19年3月)の町営施設の発電量は388万8933キロワット/時、売電量371万5956キロワット/時、売電金額7205万2383円、設備利用率20.18%、年平均風速5.76メートルだった。